



マイ スコープ

「街の中のバードウォッチング」 上越市 吉田文二

数年の予定で高田へ来た。冬は降雪の多いのには閉口したが、だんだん高田に慣れて来ると海も山も近く、四季の変化が極端にハッキリしている処が『遊び』を楽しくさせてくれて、とうとう25年も経ってしまった。高田の街のド真ん中、青田川に接した広大な敷地・藤林邸、程よく手入れされた樹木が四季折々の野鳥にも居心地が良さそうである。高田城址公園にも近いので色々な野鳥がやって来る。10年程前には、この屋敷の藪でキジが繁殖しており、子連れの子キジ達を見る事も出来た。

私は、その南隣の陋屋に住まいしている。藤林邸のお蔭で我が家の玄関先の樹木や生垣に季節の鳥達が立ち寄ってくれるので有り難い。常住者のシジュウカラ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバトからウソ、ウグイス、メジロ、ヤマガラ、カワラヒワ、オナガ、ジョウビタキ、アオジ、ツグミ、シロハラ等々、時にはクロツグミ、トラツグミ、アオバズクの鳴き声も聞くことが出来る。もっともっているのだろうが隣屋敷をスコープで覗くのも気が引ける！青田川にはハクセキレイ、セグロセキレイ、たまにキセキレイ、カワセミ、イソヒヨドリ、カルガモ、マガモ、コガモだ。7年前にコガモに混じってシマアジも立ち寄ってくれた。怠け者の私でも散歩が楽しくなってくる。昨

年はルリビタキとキジバトが廊下のガラス戸に体当たりして来た。野鳥から見れば我が家は大変邪魔なのだろうか？ガラスは綺麗に磨かない方が鳥達にやさしいようですね！

コムドリも来ていたが、最近は少し離れた社に転出してしまった。ムクドリは強い！冬の餌台も簡単に占拠してしまう。

歳をとってから始めた野鳥撮影なので、素早い動きの野鳥や珍鳥を追いかける探鳥は体力的にきついので、ごく普通に見られる「生き物」を写し込んだ身近な「自然の風景」の被写体が多くなってしまった。

我が家の西隣家・畑のカキの木で抜けるような青い空に浮かんだ雲をバックにカキの木に群れた『ムクドリ』です。愛用のレンズ



(ゾーン 250mm) の特性が発揮された(と私が勝手に思っている?)お気に入りの写真一枚です。

# 繁殖期における新潟県産鳥類の増減傾向

研究部 小池重人・小野島学

## はじめに

夏鳥の減少がどの程度なのか調べる為に、支部会員の協力を得て1996・1997年に県内の森林で調査を実施した。調査地域は53ヶ所で、このうち過去の調査が1980年代までの50ヶ所の調査結果をもとに解析した。

調査には、大滝清二、尾身秀雄、加藤誠一、木下徹、木下弘、熊倉了一、小林成光、小林高臣、後沢正和、清水保子、斉藤礼治、千葉晃、中山正則、根津和育、長谷川誠、古川英夫、古川弘、末崎朗、村山暁、柳瀬昭彦、山賀哲夫、山本明、鷺沢登雄、渡部通、渡辺範雄、渡辺央、渡辺弘雄の各氏にご協力いただいた。心からお礼申し上げたい。

## 調査地および調査方法

### 1. 調査地

調査はおもに森林で行なった。調査環境はスギやマツの植林地、広葉樹の二次林、薪炭林、自然林などさまざまであるが、植林地、二次林や薪炭林の場合、長期間伐採されず樹木が大きく成長した場所が多い。反面、道路拡張等で一部が伐採された例もある。二次林や薪炭林の場合は主にコナラやミズナラからなり、自然林の場合はブナが優占する。各地の調査距離はさまざまで、最短で1km、最長で12.4kmであった。

### 2. 調査方法

調査内容は過去の記録との比較で、1977年から1988年までの過去の記録をもとに、1995年から1997年に実施した。過去の調査は1970年代後半、1980年代前半、同年後半、の順に29か所、19か所、2か所であり、今回の調査との間隔は9年間から19年間で平均17年間である。過去の記録は5月下旬以降の

ものを利用し、それぞれの調査時期とほぼ同じ時期・時刻に今回の調査を行った。調査はラインセンサス法を用い、調査幅左右ほぼ25mを時速約2kmで歩き行なった。掲載した種は日本において繁殖する夏鳥と留鳥のみで、冬鳥と旅鳥は省いた。ただし、この中の一部には新潟県を単に通過する種や個体も含まれると思われる。

データは、各地域ごとおよび種ごとにまとめ、過去と今回の調査の増減状況を比較した。それぞれの種が生息していた地域は、減少・消滅した地域を「減少・消滅地域」、変化しなかった地域を「変化のない地域」、増加・出現した地域を「増加・出現地域」として3つに分類した。また、それぞれの種について過去と今回の調査の確認地域数と個体数も示した。個体数は1kmあたりの個体数として示した。各種の個体数の変化は、過去と今回、それぞれの生息地域を対象にMann-WhitneyのU検定(両側測定)をもちいて解析した。ただし、生息地域が4ヶ所に満たない種は検定から除外した。

## 結果および考察

表1に、確認された一部の種の生息地域数、過去と今回の調査の確認種数および個体数変化について示した。記録された種は99種で、それらは夏鳥38種と留鳥61種である。

分類群毎に結果を説明すると、カイツブリ、ゴイサギ、アオサギ、オシドリ、カルガモの水鳥類は、個体数の変化に有意差はなかった。ただし、アオサギはやや増加傾向にあり、確認した地域数、個体数とも2倍以上になっており、個体数が増加した地域は6割以上を占めていた。最近山沿いの河川ではこの

種のコロニーが観察されるようになった。

ワシタカ類は10種確認されたが、トビが大幅に減少し、個体数変化に有意差があった ( $P < 0.05$ )。しかし、それ以外の種はほとんど変化がなかった。夏鳥のサシバは全調査地域の約半数で確認され、個体数にもほとんど変化はなかった。

ヤマドリとキジは、有意差がなかったものの個体数と確認地域数はやや増加傾向を示した。これらは狩猟圧の減少が関係しているのかも知れない。ヒクイナおよびシギ・チドリ類等の水鳥類は確認した地域が少ないためはっきりしたことはいえない。ハト類については、キジバトが個体数をやや減少させた。キジバトの減少は、樹木が成長し開けた裸地が減少した事が原因かも知れない。ホトトギス類については確認地域数、個体数ともほとんど変化がなかった。

フクロウ類についてはもともと確認地域は少なかったが、コノハズクは今回の調査ではまったく記録されなかった。ヨタカは過去においても確認地域が4ヶ所と少なかったが、今回の調査ではまったく記録されなくなり、個体数の減少傾向に有意差があった ( $P < 0.05$ )。アマツバメ類はアマツバメが微増しているが有意差はなかった。カワセミ類はカワセミに大きく増加傾向が認められ、個体数変化に有意差があった ( $P < 0.01$ )。確認地域も2か所から8か所と大幅に増加している。他の2種についてはやや減少傾向がある程度である。ブッポウソウについては確認地域が7か所から2か所へ、個体数は0.61/kmから0.33/kmと減少したが有意差はなかった。キツキ類ではアカゲラが少し減少したものの他の種ではほとんど変化がなかった。

ツバメ類では、ツバメが減少し有意差があった ( $P < 0.05$ )。県内のツバメの繁殖地では近年営巣数が減少したという情報もある。ただし調査地が森林に偏っているので、樹木の成長により採食の際に森林に立ち寄りなくな

った可能性もある。その他のツバメ類については、有意差はないものの減少傾向にある。

セキレイ類ではキセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイにはほとんど変化がなかった。一方ハクセキレイの個体数は有意に増加し ( $P < 0.05$ )、確認地域も増加している。近年分布を拡大し、山沿いの地域まで生息する様になった事が増加の原因であろう。

サンショウクイは非常に減少し、個体数変化に有意差があった ( $P < 0.01$ )。確認地域は43か所から29か所に減少し、個体数が減少した地域は44生息地域中29地域であり、その中の15地域で消滅した。ヒヨドリはやや減少傾向にあるものの、有意差は認められなかった。

モズ類はチゴモズの減少が大きく個体数変化に有意差があり ( $P < 0.01$ )、今回の調査ではまったく確認されなかった。アカモズは個体数変化に有意差はないものの、約10年前に新潟市の海岸では普通に観察されたが近年ほとんどその姿を見る事は出来なくなった。今回の調査ではまったく記録されていない。



カワガラス

カワガラスは大きく減少し、個体数変化に有意差があった ( $P < 0.05$ )。今回の調査でも確認地域は13か所から6か所へと大きく減少している。ミソサザイはほとんど変化がなかった。カヤクグリについては高地の調査地が少ないのはっきりしたことはいえない。

ツグミ類はほとんど変化が認められなかった。しかし、アカハラでは以前確認された地



表 1. 新潟県の調査において確認された種の、過去の調査(1977~1988)と今回の調査(1995~1997)の記録地域数と確認個体数の変化。(抜粋)

過去の調査と今回の調査の個体数の変化状況は、マン-ウィットニーのU検定(両側検定)で検定した。ただし、生息地域数が4か所に満たないものは検定解析から除外した。

「過<今」と示したものは、過去の調査よりも今回の調査の個体数が有意( $P < 0.05$ )に増加していることを示している。nsは有意でない( $P > 0.05$ )ことを示している。

種名	生息地域数	個体数の変化状況で分けた生息地域数			記録した地域数		個体数			
		減少・消滅地域数 (%)	変化のない地域数 (%)	増加・出現地域数 (%)	過去の調査	今回の調査	過去の調査 (/1km)	今回の調査 (/1km)	増減状況 P	
トビ	留鳥	41	22 (54%)	5 (12%)	14 (34%)	34	27	0.64	0.42	0.036 過>今
ホトトギス	夏鳥	40	16 (40%)	7 (18%)	17 (43%)	30	34	0.80	0.66	0.545 ns
ヨタカ	夏鳥	4	4 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	4	0	0.30	0.00	0.013 過>今
アカショウビン	夏鳥	13	8 (62%)	0 (0%)	5 (38%)	8	8	0.31	0.22	0.209 ns
カワセミ	留鳥	9	0 (0%)	1 (11%)	8 (89%)	2	9	0.08	0.51	0.000 過<今
ブッポウソウ	夏鳥	6	4 (67%)	1 (17%)	1 (17%)	7	2	0.61	0.33	0.086 ns
アオゲラ	留鳥	44	14 (32%)	8 (18%)	22 (50%)	31	31	0.33	0.36	0.339 ns
ハクセキレイ	留鳥	7	1 (14%)	0 (0%)	6 (86%)	1	6	0.05	0.78	0.017 過<今
サンショウクイ	夏鳥	44	29 (66%)	7 (16%)	8 (18%)	43	29	1.06	0.69	0.003 過>今
チゴモズ	夏鳥	8	8 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	8	0	0.45	0.00	0.000 過>今
アカモズ	夏鳥	2	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	2	0	0.80	—	—
カワガラス	留鳥	15	11 (73%)	1 (7%)	3 (20%)	13	6	0.38	0.17	0.013 過>今
クロツグミ	夏鳥	37	11 (30%)	7 (19%)	19 (51%)	28	30	0.47	0.74	0.091 ns
アカハラ	留鳥	2	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	2	0	0.66	0.00	—
ヤブサメ	夏鳥	47	25 (53%)	4 (9%)	18 (38%)	38	37	0.95	0.69	0.226 ns
ウグイス	留鳥	49	25 (51%)	7 (14%)	17 (35%)	47	48	2.41	1.77	0.517 ns
オオヨシキリ	夏鳥	11	2 (18%)	0 (0%)	9 (82%)	5	9	0.20	0.97	0.028 過<今
センダイムシクイ	夏鳥	31	23 (74%)	1 (3%)	7 (23%)	25	13	0.92	0.23	0.003 過>今
キビタキ	夏鳥	41	13 (32%)	3 (7%)	25 (61%)	31	39	0.85	1.06	0.060 ns
オオルリ	夏鳥	46	17 (37%)	10 (22%)	19 (41%)	40	43	1.03	0.84	0.678 ns
コサメビタキ	夏鳥	9	6 (67%)	1 (11%)	2 (22%)	7	3	0.46	0.37	0.266 ns
サンコウチョウ	夏鳥	16	8 (50%)	3 (19%)	5 (31%)	12	10	0.42	0.38	0.744 ns
ヤマガラ	留鳥	46	17 (37%)	3 (7%)	26 (57%)	35	39	0.81	1.03	0.154 ns
シジュウカラ	留鳥	47	23 (49%)	7 (15%)	17 (36%)	41	46	1.81	1.41	0.201 ns
メジロ	留鳥	45	23 (51%)	4 (9%)	18 (40%)	41	43	2.20	1.79	0.900 ns
ホオジロ	留鳥	50	29 (58%)	2 (4%)	19 (38%)	50	49	3.77	3.01	0.051 ns
ノジコ	夏鳥	27	11 (41%)	2 (7%)	14 (52%)	17	25	0.86	1.02	0.183 ns
アオジ	留鳥	7	4 (57%)	0 (0%)	3 (43%)	5	4	0.47	1.85	0.647 ns
カケス	留鳥	45	28 (62%)	4 (9%)	13 (29%)	39	33	0.96	0.45	0.006 過>今
ハシボソガラス	留鳥	45	21 (47%)	9 (20%)	15 (33%)	41	40	2.11	1.30	0.818 ns
ハシブトガラス	留鳥	43	17 (40%)	10 (23%)	16 (37%)	35	37	1.13	0.73	0.512 ns
種数計	99									

域でもまったく確認されておらず、減少しているのかも知れない。県内はアカハラよりクログミが広く分布し個体数も多い。新潟市の海岸林では以前同所的に2種が生息していたが、今回の調査ではアカハラは記録されなかった。



オオヨシキリ

ウグイス類については、オオヨシキリを除き減少傾向にあった。オオヨシキリは有意に個体数が増加し ( $P < 0.05$ )、確認地域数も増加している。センダイムシクイは有意に個体数が減少し ( $P < 0.01$ )、また31生息地域中23か所で個体数の減少が認められ、そのうち18地域で消滅した。この種の減少と増加した地域には地域性があり、ほぼ北部・東部・南部では減少し、中部から西部にかけては増加傾向にある。

ヒタキ類についてはキビタキがやや増加傾向にあり、個体数も確認地域数も増加している。オオルリはほとんど変化がなかった。コサメビタキとサンコウチョウの個体数は有意差はないものの減少傾向にあり、確認地域も減少した。コサメビタキの個体数が減少した地域6か所はすべてで消滅しており、サンコウチョウの減少地域8か所では6か所で消滅している。これらの消滅地域はサンショウクイやセンダイムシクイと同じ地域というわけではなく、単に繁殖地の環境変化が消滅の原因ではない事を示唆している。

シジュウカラ類では大きな変化はほとんどなかったが、ヤマガラがやや確認地域数と個

体数が増加し、シジュウカラがやや個体数が減少している。しかし、シジュウカラの場合確認地域はむしろ微増している。シジュウカラの確認地域の微増は、伐採跡地に二次林が成長して来た事が原因していると思われるが、個体数の減少は二次林や薪炭林がより成長し、森林が明るい林から暗い林に変化しつつある事が原因なのかも知れない。

コジュウカラはもともと県内ではあまり多くなくほとんど変化はなかった。キバシリも多くなかったが、近年散発的に繁殖が確認されるようになった。メジロはやや減少傾向にあるものの個体数変化に有意差はなかった。

ホオジロ類ではホオジロが個体数を減少させ、減少地域も多かった。この原因はおそらくシジュウカラが減少した理由と同じく樹木の成長にあり、明るい林が暗い林に変わったため生息に適さなくなったものと思われる。ノジコは確認地域数および個体数が増加している。一方アオジは確認地域数と個体数が減少しているが、17年間に個体数が23倍に増加した地域もある。

ヒワ類、スズメ類については、確認地域と個体数にほとんど変化はなかった。

ムクドリ類では、ムクドリの確認地域と個体数が減少していた。明るい裸地が減少し、巣立ちの後の群れが森林付近で採食しなくなった事が減少という形で現れたものと思われる。

カラス類については、カケス ( $P < 0.05$ ) およびオナガ ( $P < 0.05$ ) が大きく個体数を減少させた。オナガについては明るい林にすむので、樹木が成長し林が暗くなったのが原因と考えられるが、カケスについては樹木が成長すればむしろ増加しても良いと思われる。そのためカケスの減少については、繁殖地域よりもむしろ越冬場所に原因があるのかも知れない。新潟県は多雪地帯の為、留鳥でさえ多くの種や個体が冬季に山地を離れ、里に下ったりあるいは県外の少雪地域に移動するも

のと思われる。そのため越冬場所の環境の悪化がこの種の減少を招いたのかも知れない。ハシボソガラスおよびハシブトガラスについては、ほとんど変化はない。

なお、50か所の調査地域の内、夏鳥の個体数が減少した地域は27か所で、増加した地域は22か所であった。一方留鳥では減少した地域は35か所で、増加した地域は15か所であった。

過去の調査では夏鳥が36種確認され今回の調査では29種(81%)に減少した。留鳥は過去に55種確認され今回は53種(96%)に減少した。夏鳥と留鳥いずれも減少しているが夏鳥の方がやや減少程度が大きい。また、夏鳥では個体数の減少地域数が生息地域の50%以上の種は19種、増加地域数が50%以上の種が11種であった。一方留鳥ではそれぞれ29種、19種であった。個体数の増減では、減少、増加、変化なしの順に夏鳥は26、11、1種(68、29、3%)、留鳥は31、26、4種(51、43、7%)であった。

個体数が有意に増加したものは留鳥がカワセミ、ハクセキレイの2種、夏鳥がオオヨシキリの1種で、有意に減少したものは留鳥がトビ、カワガラス、カケス、オナガの4種、夏鳥がヨタカ、ツバメ、サンショウクイ、センダイムシクイの6種であった。

以上の様に、夏鳥も留鳥も種数が減少している地域が多い事、過去の調査より今回の調査の方が種数が減少している事、個体数の減少地域数が50%以上の種が増加地域数が50%以上の種よりも多い事、個体数を減少させた種が多い事、有意に個体数を減少させた種が有意に増加させた種よりも多い事から、全体として夏鳥も留鳥も減少傾向にあるといえる。中でも夏鳥は留鳥以上にその傾向が大きい。

しかし、個々に見ていくとキビタキやヤマガラ等の様に、微増ではあるが増加している種もいる。繁殖地の一部が伐採や開発により

減少しているにも関わらずこれらの種の個体数が増加しているのは、樹木が成長し林内が暗くなったことにより、彼等の適した環境が増えつつある事が原因であると思われる。これは、化石燃料の使用増がによって薪炭林として林が利用されなくなったり、植林した杉林が大きく成長し、まだ伐採されずにいることなどが考えられる。キビタキもヤマガラもこのような林内に巣箱等の適当な営巣場所を架設すると利用することが多い。一方シジュウカラやホオジロなど明るく開けた林や林縁部に生息する種が個体数を減少させている事は、おそらく同じ理由で逆に影響していると思われる。この様に個体数の増加や減少については、繁殖地の環境変化が一つ重要な要因となっているものと考察される。

しかしながら、樹木の成長により増加してもよさそうな、よく発達した林に生息するサンショウクイやセンダイムシクイそして、カケスのような種が大幅に減少していた。この事は繁殖地の個体数の回復を上回る程度以上に、これらの種の越冬環境が急激に悪化したものと思われる。カケスの場合は県外の小雪地域の雑木林等の減少が影響しているであろう。またサンショウクイ、センダイムシクイ、サンコウチョウ等の夏鳥の個体数の減少あるいは地域的消滅は、おそらく海外の越冬地域の急激な環境悪化が大きく影響しているものと思われる。一方センダイムシクイの地域個体群の個体数変化の違いは越冬地域の環境悪化が進んでいるにも関わらず、一部では植生が回復しつつある場所も存在する事を示唆しているように思われる。

---

#### —引用文献—

- 新潟県. 1993. 鳥獣保護対策調査報告書Ⅱ. 新潟県生活環境部自然保護課。
- 新潟県野鳥愛護会. 1982. 鳥類生息状況調査報告書. 新潟県生活環境部自然保護課。

# 白夜の中の鳥たち (V)

南蒲原郡栄町 渡辺 央

## コハクチョウの非繁殖群

ステーションから5km程先のツンドラに繁殖に参加していないハクチョウだけが群れているらしい。しかのその中に頸環をした1羽が混じっているという。7月9日の朝も雲が低く、相変わらず寒かったが、私と同行の菊地先生の2人はこのコハクチョウの非繁殖群の観察に出掛ける事になった。昼食持参で午前10時40分にステーションを出発。クビワカモメのコロニーと抱卵中の標識コハクチョウ「062C」を右に見て、一望千里のツンドラを北に向かって歩く。菊地先生は時々湖沼で水の中の生物を採取したりしておられたが、私は周りに出現する鳥をゆっくりと観察しながら歩いた。オジロトウネン、ハマシギ、オオハム、コオリガモ、遠くには墨絵の様にカナダヅルが5羽見える。先の方に白い鳥の死骸らしいものを発見した。近付くとシロカモメの成鳥で、古いものであったが全く腐敗臭はしなかった。死骸といえば滞在中、この他にワタリガラス、セグロカモメの死骸も発見している。2時間歩いた。遠くにハクチョウの群れが点々と見えてくる。近付くと私達を警戒して群れは先へ先へと逃げる。群れから少し離れて番いの様だが2羽でいるものもいる。これらの白鳥に何等かの理由で繁殖に失敗した番いや、まだ繁殖年齢に達しない若鳥で構成されているというが、群れの様子は、日本の水田で見ると変わりがない。少し水の多いところで盛んに採餌しており、その場所に行くと大きな糞塊がゴロゴロしている。群れは142羽を数えたが、その中にアメリカコハクチョウが1羽入っていた。そして確かに標識をした1羽も発見され、番号は「064C」と読み取れた。本田清さんの話では

今ここで抱卵中の「062C」と同じ1984年に標識された1羽らしい。1時間ほど観察して再びツンドラの鳥をセンサスしながらステーションに引き返した。

## 「062C」に2羽の雛が誕生する。

7月10日はチャウン最後の白夜になるはずであった。夕食を終わった頃から空が明るくなりだし、久々に太陽がツンドラを照らした。食事の前に咲き広がるワタスゲが初めて眩しく感じられた。私達はそれぞれ最後の夜を楽しみにツンドラに出た。初めて青空の中にシロカモメをとらえ、シロハラトウゾクカモメのホバリングを観察した。細く長い尾羽をなびかせながらあちこちでホバリングしているその数は合計28羽を数えた。シロハヤブさらしきものが飛んだが確認出来なかった。可憐に咲くサクラソウや絨緞の様に地上を這っているコケモモなどを撮影し、ウオッカを呑みながら午前1時過ぎまでツンドラにいた。



コハクチョウ (062C) の親子

いよいよチャウンを発つ日がやって来た。昼に荷物をまとめ、シュミット空港からのヘリコプターを待った。しかし、シュミットの方の天候が悪いらしくヘリはなかなか来な

い。そんな午後3時に定期便らしいヘリで、朝日新聞社と通訳の人が降りて来た。その人達の話では向こうの天候が悪く5日間もヘリが出ないで足止めを食ったという。結局この日私達のチャーターしたヘリは来なかった。皮肉なものでここにきてチャウンは今までにない天気になり青空が広がっていた。そして、この1日の延期が我々に幸いした。来た時から観察を続けていたコハクチョウ「062C」に雛が孵化しているらしいのだ。しかし、私は夕食までの間、天気を利用して昆虫採集をする事にした。先ず来る前に同僚の山屋学芸員に頼まれていた甲虫類を採取すべく、ガチョウの飼育小屋近くに積まれていた堆肥を掘ってみた。しかし、いくら掘れども甲虫は出て来なかった。ゴミムシの仲間一匹の採集がやっとという状態であった。気温が上がるに従ってツンドラにもチョウやハチが姿を現わしたが、採集したのはベニヒカゲ2匹、マルハナバチ1匹という程度の成果であった。さて、夕食後の午後10時30分、まだ十分に明るい中「062C」の親子に会えるかと一人で出掛けてみた。「062C」は丁度10年前の1984年にここチャウンで生まれ、標識されている。そして、その年の冬に兄弟達と一緒に新潟平野に渡来したのを本田清さんが写真に撮っておられる。本田さんにとっては10年ぶりの再会という事になる。巣のあった湖沼まで行くと番いはあまり広くない別の湖沼の岸辺で採餌中であったが、その両親の間に小さなこぶし大の雛が2羽確認された。反対側の岸から写真を撮っているとやがて両親が2羽の雛を真ん中にこちらに向かって泳ぎ始めた。やや弱くなった光の中をゆっくりと泳いで来る親子4羽は絵本の中の一コマを見る様であった。やがて親子は私のいるすぐ近くの岸にやって来た。「062C」は岸辺に生える草をむしり採って食べている。その音がバリ、バリと丁度羊が草を食べている様に聞こえる。両親が岸に上がると小さな雛もよろ

けながら付いて来て草をついばんだりしている。「062C」が翼をやや開き加減に岸に座り込むとその腹の下に2羽の雛は潜り込んだ。30枚ほどの写真を撮って少し暗くなった中をステーションに向かって引き返したが、途中振り返ると「062C」はそのまま座っていて、その横に父親がたたずんでいた。白夜に見るチャウン最後の風景であった。

## おわりに

翌日、午前11時に昨日と同様に荷物をまとめ、ひたすらヘリの音がしないかと待った。11時50分我々には全く聞こえなかったが、小学生のアンドレー君がヘリの音を聞き分けた。我々はこの9日間世話になったマリナさん一家の人達やゲナジー博士に感謝し、全員で記念写真を撮り、マガダンに帰るというアンドレー君も一緒にチャウンを飛び立った。来年からは、このステーションも閉鎖すると聞いた。私にとって二度と来れまいチャウンをコハクチョウはこれからも毎年往復するのだろう。この年の冬「062C」が2羽の雛を連れて新潟平野に姿を現わすのを期待したが見つけだす事は出来なかった。

最後にこの北極圏の旅で私達が出会った鳥を紹介して終わりにしたい。

アビ類(シロエリオオハム、オオハム); ガンカモ類(コハクチョウ、ヒシクイ、オナガガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、キンクロハジロ、スズガモ、コオリガモ、ケワタガモ、メガネケワタガモ、ピロードキンクロ); ツル類(カナダヅル); シギ・チドリ類(ハジロコチドリ、トウネン、オジロトウネン、アメリカウズラシギ、ハマシギ、エリマキシギ、キョウジョシギ、タシギ; ヒレアシシギ類(アカエリヒレアシシギ、ハイイロヒレアシシギ); トウゾクカモメ類(シロハラトウゾクカモメ、クロトウゾクカモメ); カモメ類(ユリカモメ、セグロカモメ、シロカモメ、クビワカモメ、キョクアジサシ); ライチョウ類(ヌマリイチョウ); スズメ類(ハクセキレイ、ツメナガセキレイ、ユキホオジロ、ツメナガホオジロ、ベニヒワ、ワタリガラス [死骸]);

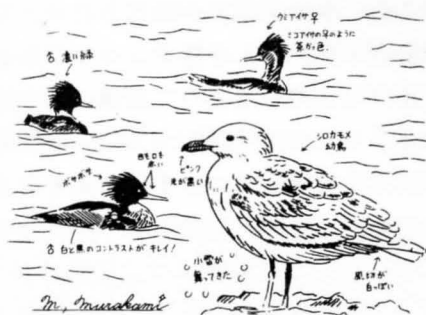


# 寺泊探鳥会に参加して

新潟市 村山正志

待ちに待ったこの日がやって来た。昨年は参加出来なかった為、首を長くして1年も待っていた。思えば平成9年は超ベテラン・達人の方々と接する事が出来、鳥見人生の中でも識別等が飛躍的に上達した年だった。出来る限り探鳥会に参加した成果だと思っている。探鳥は基本的に1人でも楽しめる趣味だが、会に出るとベテランの方々からさまざまな知識と情報等の享受を得られる。又、大人数で四方八方を見る為、鳥を早期に発見出来る。(何だかカモ類のワシタカ早期発見に似ている) いずれにせよ1人でムフフと楽しむのも良いが、大人数だと楽しみが何倍にもなる様である。「探鳥会、一度行ったらやめられない！」

私のフィールドは新潟市の下町(しもまち)である。東は信濃川河口と新潟西港、西は松林と日本海。そんな環境で生まれ育った私だが、ウミアイサだけは未だ見た事が無かった。なぜ寺泊港に飛来するのだろうか?……そんな疑問を胸に夢と期待と探鳥道具を乗せて一路寺泊港へ向かった。



大雪も一休みし、晴時々曇り。大河津分水を越えると早速ノスリとチョウゲンボウに出迎えられる。参加者が集まり、今回の探鳥会は全員でワイワイゾロゾロの形となった。これもまた楽しい。お目当てのウミアイサは皆にあっさり発見された。初めて見るその優雅

な美しさに感動である。それにしてもよく観察するとおもしろい形態をしている。雄雌とも後へなびくボサボサの頭をしていて、まるで飲み過ぎた翌朝の自分の頭を見ている様だ。おまけに目も嘴も赤い。真っ黒に見える雄の頭は時折ヒスイ色の輝きでこちらを魅了する。雌はミコアイサに似て淡い茶褐色の頭でしとやかで綺麗だ。しかし、無口なグループだ。賑やかな我々とは大違いであった。寺泊港に飛来するのは餌の関係らしい。

寺泊水族館付近では小雪が、舞ったがシロカモメの幼鳥に出会い感極まっていたので気にならなかった。カモメ類や冬鳥の主要メンバーを楽しんで戻る途中、「アメ横」の脇の広場でタゲリを見つけたのはラッキーだった。

鳥を見ていて思う事だが、例えばセグロ、オオセグロ、シロ、ワシカモメ等は何万年も前の祖先は同じ種だった様に思える。環境の違いで亜種から別種に進化して来たのでは? 同じ様な事例はアカハラ・アカッコ、コマドリ・アカヒゲ、キビタキ・ムギマキ等々、上げたら切りが無い。オオヒシクイとヒシクイもいずれは別種扱いになる日が来るかも知れない。

私達は億単位の生物進化のほんの一瞬を見ているにすぎない。だから大事にその瞬間を見て行きたいと思う。そして未来の月日の流れの中で鳥類はさらなる進化を遂げるだろう。

探鳥会の後、事務局の方々の尽力で熱々のタラ汁をご馳走になった。バカうまい!! 冷えた身体には最高だった。これからもベテランの方々の後にくっついて知見を広げ、また深めて行こうと思う。今夜はウミアイサを復習しつつ、バーボンで一杯やろう。それでは次回の探鳥会に期待して乾杯!

# 四季の福島潟と水の公演福島潟

水の駅「ビュー福島潟」 小松隆宏

東京から去年の4月に豊栄市へ赴任し福島潟のほとりでこの1年間自然を観察してきました。そこで福島潟の四季と水の公園福島潟での職務を通して感じた事をここで紹介させていただきます。

## 福島潟の四季

### 『春』

ヒバリが囀りツバメが飛び交う春です。桜満開の中、雪を残す五頭山を背景にした福島潟をシギやチドリが通過し、野草の花が咲きそろいます。昨年は5月12日にコアジサシが初認できました。梅雨を過ぎると夏はすぐそこです。

### 『夏』

カッコウの声が響きわたり、オオヨシキリ、コヨシキリが昼夜無く囀りをつづけています。夜になるとウシガエルの声も加わり、ホタルの群舞を見ることもできます。水草もハスの開花に続き、ガガブタ、オニバス、オモダカの花を楽しむことができます。

### 『秋』

潟を渡る風も寒くなってきます。賑やかだった夏も終わり、潟もぐっと落ち着いてきます。トンボが飛び交う夕焼けの中、虫の音が響きます。野鳥は夏鳥が少しづつ姿を消し、入れ替わって冬鳥たちが北国からやって来ます。昨年は9月30日に遠くカムチャツカからオオヒシクイがやって来ました。

### 『冬』

この冬の福島潟には天然記念物のヒシクイ(そのほとんどが豊栄市が市の鳥として保護している亜種オオヒシクイです。)約3,000羽、オジロワシ3羽が羽を休め、他の雁類としてはマガン、サカツラガン、ハクガンも姿

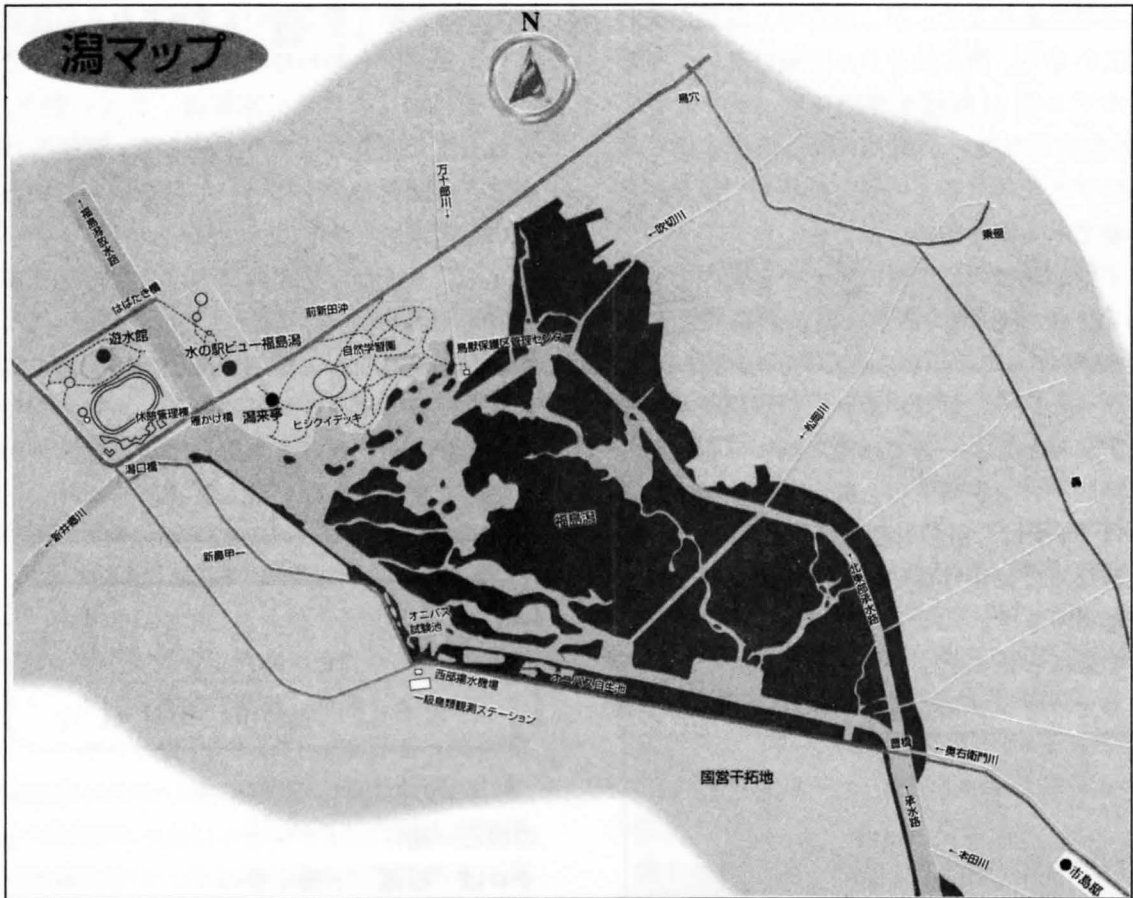
を見せてくれました。ワシタカ類ではオオタカ、ノスリ、チュウヒ、トビ、チョウゲンボウ、ハイロチュウヒの常連に加え、ハヤブサ、チゴハヤブサ、コチョウゲンボウの観察もできました。

野鳥を驚かさないで観察を行えるようにと設置した潟中央部のリモコンカメラの映像からオジロワシの食事シーンを観察をすることができ、マガモ、オオヒシクイ、ハクチョウを食べている事が分かりました。オオヒシクイについてもマコモの根茎部やミゾソバなどを食べているシーンも観察ができました。今後このカメラの利用により多くの情報が得られるのではないかと期待しているところです。このカメラの操作は4階の映像展示室で自由に行えるようになりましたので、試してみてください。

## 水の公園福島潟

潟の中央カメラの話が出たところで水の公園福島潟を簡単にご案内させていただきます。この公園は豊栄市が誇れる自然と文化の想像拠点・福島潟」を基本コンセプトとして豊栄市が福島潟のほとりに整備しました。潟に一番近い自然学習園は昭和30年代の動植物の再生を目指しています。ここでは水鳥へ





の給餌はしない方針にしています。禁止事項は他にあまり決めていませんがマナーを守ってみんなで利用出来る公園にしたいと考えています。

水の駅「ビュー福島潟」は7階建てで皆さんの様な自然に関心の高い方だけでなく、多くの人に潟の価値を知って頂き、共に高めていくための施設です。

1階のビューショップと3階のライブラリ、コーヒーショップは市民団体の「ねっとわーく福島潟」が運営しています。4階から上は有料ゾーンで展示を見ながら展望を楽しめるようになっていきます。先に四季の福島潟を紹介させていただきましたが、残念ながら自然はいつもいいところばかりではありません、そこで潟の動植物を映像とレプリカで展示し興味を持って頂き、本物の自然を楽しむ仲間になって頂きたいと考えて作られています。

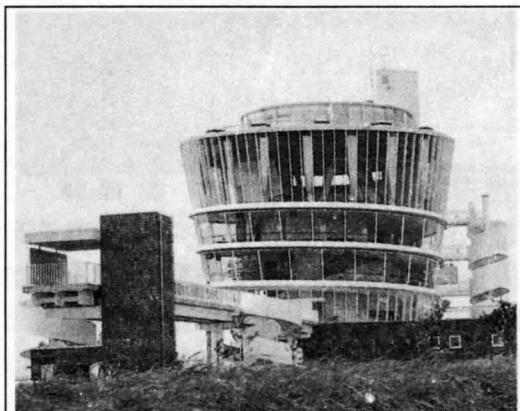
## 自然環境と人間の関係

福島潟で勤務しながらもう一つ感じたのは、福島潟に残っている自然環境と人間の関係についてです。東京から来た私にとっては福島潟の自然は後世に残していくべき非常に価値のある自然と感じましたが、福島潟に大きなインパクトを与えている周辺住民の認識としてその貴重さが十分に認知されていない様に感じました。これは30年前に行なわれた国営干拓前の今の2倍（現在193ha当時434ha）の潟を愛してきた人々にとって、今の福島潟が昔の潟と程遠い潟になってしまった事と、そういう感想を持つ人達の話をもそのまま聞いて福島潟を過小評価している人が多いのが原因ではないかと思われます。福島潟の過去のデータを見るとその素晴らしい環境に驚かされますが、同時に水との戦いに苦労してきた歴史も見ごせない事も分かりました。その上で今の福島潟を見てみると昔

ほどではありませんが、世界中で自然が失われている今、夏にはホタルが飛び交い、魚類もカジカ等31種類が確認され、多くの野鳥（現在約220種）が集まる福島潟は大切に残していくために多くの人に理解して頂く事が必要である事を痛感いたしました。

不特定多数の利用者の方々のご案内をしていると「潟をゴルフ場にしたらいい」とか「温泉を作ったらいい」とか「牧場を作ろう」とか…といった意見が多いという現状もあります。しかし、一方では福島潟にいる野鳥のお話しとスコープで少し野鳥を見ていただくだけで「やはり自然は残そう」「こういう物は残さなくてはいけない」という声に変わる事実もあります。

そこで、水の駅「ビュー福島潟」ではバードウォッチング等も含めて自然への認知を高



### 水の駅「ビュー福島潟」

開館時間 5月～8月 9時30分～19時

9月～4月 9時30分～17時

休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)

年末年始12月28日～1月4日

●常設展望ギャラリー ●映像展示室

●企画展示室 ●展望ホール(200人収容) ●展望台

※展望ホール/閉館～21時30分まで専用利用可

めていきたいと考えています。これらの活動には市民団体も加わり準備をしている最中です。福島潟における公園整備、市民活動等、どれもまだ完璧ではありませんが、積極的に自然と人間との共生について道を探していきたいと考えています。

さらに今後は空を自由に羽ばたく野鳥の事を考えるために福島潟だけでなく越後平野、新潟県、渡りルートと視野を広げて保護に協力し、バードウォッチングを楽しんでいきたいと思えます。ぜひとも野鳥や自然保護に対してのご協力をお願い致します。

## 今が旬のとり、ショウロとり

柏崎市 小林 成光

3月末の日曜日、ふだん遊んでやれない末の娘と一緒にショウロとりに出かけた。ショウロは“松露”と書く春のキノコで、海岸近くの黒松林の砂の中に埋まっている。ほんの少しだけ頭を出した丸いキノコを見つけては、キャーキャーと大騒ぎする娘に「静に！静に！」を連発するほどの収穫だ。それを歯ブラシで洗って、吸い物、酢みそあえ、卵とじにして食べた。あぁうんめえ！この歯ざわりが最高だ。酒もすすむ。子供の頃、遊び仕事の相手だった松露も、今じゃ高級料亭にほんの少し並ぶ程度だ。

これからの季節、木の上の鳥も楽しいが戻もとの鳥（山菜とり、キノコとり）も又楽しい。ア～ ホーホケキョ。

発行 1998年3月31日 No.45

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒951-8116 新潟市東中通1番町86番地28

☎025-229-2018 本間由紀子方 <振替口座>00610-1-6002